言の波

発行所
カトリック長崎大司教区
本部事務局
〒852-8113
長崎市上野町10-34
カトリックセンター内
TEL 095(846)4246
FAX 095(842)4460

一八八殉教者の列福式を目の前にして

イエズス会司祭
結城　了悟

（一）

一九八一年の事であった。ローマからのロッシRossi枢機卿の手紙を受けた里脇枢機卿はそれを紹介した後に、この度選ばれる日本人殉教者の列福のための歴史委員会に入るようにと私におっしゃった。その依頼を受けたとき、私は喜んで「ついに来るべき時が来た」、と感じた。今まで行なわれた列福式は、おもに日本で殉教した宣教師とその協力者であって、今度、全員日本人であって、日本の教会にどのようにキリストの教えが受け入れられたかを顕示することになる。

（二）

あれから二十七年の歳月が流れて、列福のためにすべて準備されていて、私は神様に感謝しながらその日を心待ちにしている。列福される一八八名の日本人殉教者は、江戸時代初期の徳川の迫害を受けた教会をみごとに紹介している。その教会はイエスと日本の心との出会いから生まれた。

東北から薩摩まで当時の社会のあらゆる階層の人々が含まれていて、どんな殉教者でも、基本的にイエスに対する強い愛と信仰を表している。それは個人的にも、また、特に家庭的にもすばらしい歴史を見せている。**第二ヴァティカン公会議の記録に書いてある言葉「家庭という小さな教会」が、この歴史を伝えるために選ばれたようである。**

生月のガスパル西の家族三世代の殉教、北有馬の三人の武士の家族、米沢で家族ぐるみでできた教会、あるいは他所では見られない、小笠原玄也とみや、その九人の子供との家族の、二十年間にも及ぶ監禁など、さまざまな立派な例が見られる。確かに鎖国の二百五十年の間、潜伏キリシタンは明治時代まで、家庭で信仰を守り伝えることができた。

（三）

その歴史のなかでイエスに対する個人的な愛の花がどんな所でも咲いている。例えば、十二歳のディエゴ林田の言葉「イエス様はカルヴァリオ山に歩いて行きました」が、自分を動かす思想を表していた。メルキオール熊谷が、自ら縄目を受けて、公然と大名の前に引き出されたいと望んでいたと記録に書いた宣教師は、次のような説明を加えている。「この武士は、イエスの御受難をよく黙想していた。」ガスパル西は、十字架での処刑を願い、また八代の慈悲役ジョアン服部の喜びの理由は、「先に私のために亡くなられたイエス様のために、命を捧げることは喜びが溢れる思いです」。その言葉は当時の信者の心を表している。小さなもののために生涯を捧げたミゲル薬屋は、イエスの言葉「かれらにしたのは、わたしにしてくれたことである」の力によって、歓喜の歌を歌って炎に包まれて亡くなった。

（四）

同時に、この度列福される四人の司祭は、すでに列福された福者セバスティアン木村、福者アントニオ石田、また迫害に耐えて亡くなった伊東、松田、小西などのほかの司祭のように、あの時代に要求された司祭の姿を見せている。

結城了雪の長い宣教の旅では、いつも信者の為に三つの秘跡―洗礼、告白、御聖体の助けを備えていたと記録されていた。私は、外海の山奥にある「金鍔谷」に登って、トマス金鰐が潜んでいた洞穴に入り、そこで御ミサを捧げ、深い感動を覚えたが、言うまでもなく私はそこで夜をすごしたことがないが、あの山奥の荘厳な静寂の中で、金鍔神父を支える祈りの生活を想像できた。寂しく野生動物のように追跡された彼は、みご

とに日本の教会に対する深い愛をもって、すべてを捧げると同時に、彼が書いた手紙が示すように、純粋な国際人の心を持っていた。

雲仙で亡くなった殉教者は、殉教の五、六年前にすでに教皇パウロ五世宛ての手紙では、その心を表していた。「ガラサ（恩恵）を以て、キリストとローマのサンタ・エケレジヤ（教会）の御證據に、身命を捧げ奉らむと、燃立つばかり存じ奉り候。」

同時に一般の信徒が樫山の赤岳、浦上の信者が岩屋山に登り、ローマに向かって祈りを捧げていた。

これから彼らは、私たちの仲間となって、一緒に道を歩み、彼らの殉教場所が開かれた本のようになり、そこに私たちは彼らの教えと理想を読むことができるようになったのである。

Q&A 「列福式を目前にして」

Q. 列福式が目の前に迫ってまいりました。よくこの列福式を単なるイベントにしてはならないとかお祭り騒ぎにならないようにと言われます。このイベントを開催することによって、教会の体質が変わるような企画的なものになるのでしょうか。

A. 今月10月5日から列福をひかえともに祈る七週間がはじまります。この祈りの中でご質問の課題について、よく黙想する必要があります。

この歴史的イベントを境にして、教会の体質が変わるかどうかというテーマは、ことここに至っては極めて抽象的です。もはやそういう段階ではなく、この自分自身がどう変わるかという、背水の陣を敷いた黙想にならなければなりません。

なぜなら教会と言っても、それは現実に生活している一人ひとりから成っているのであって、変化の届かない抽象的なことばの中にこもっている段階ではないと思います。

迫害者と真正面から向かい合い、見る影もなく変わり果てることによって、永遠不変のものを世界にかかげた殉教者の心を、自分の心とする時が来た、と受けとめるべきではないでしょうか。

それはそのまま、十字架の死に至るまで、見る影もなく変わり果てることによって、変わることのない永遠不変の神の愛を世にもたらした、イエス・キリストを力づよく証しすることになるのです。

Q. 日本の現代史では「戦前戦後」ということばが使われるように、戦争の前と後では、全く変わった社会状況が訪れました。列福式は日本の教会の歴史の中で、どのように位置づけられるのでしょうか。

A. 戦前戦後的変革に匹敵する、教会の歴史上の変化は、「公会議前後」であることは言うまでもありません。

その変化を具体的に実行しようとして、公会議の日本教会版としての、ナイス（福音宣教推進全国会議）があり、一貫して提案されているテーマを追いかけるために、「聖体年」があり、「ロザリオ年」があり、そして、今年は「パウロ年」があります。その一貫して追いかける

テーマとは「宣教」ということです。

その宣教を、どのように福者たちから力をいただいて進めていったらよいのかというテーマを持って、これまで黙想に黙想を重ねてきたわけです。

一つのキーワード（鍵となることば）として、殉教者にならい、いまの私たちの信仰生活を、本気で「証し」となるようなものに変えていくこと、ということではないかと思います。

これまでの信仰生活の規準が「分かっているかどうか」であったとするならば、「生きているかどうか」という新たな視点、それも「ともに生きているかどうか」という見方を取り入れてみてはいかがでしょうか。

Q. この列福式のそもそもの出発点は、27年前の教皇来日にあったとは聞いています。あの時の「戦争は人間のしわざ」の有名な冒頭句ではじまるヨハネ・パウロ2世の「広島平和アピール」はいまも心に残っています。それと一対となった「長崎殉教アピール」ともいうべきものはないのでしょうか。

A. 確かにあの時、マスコミを通して、全世界に向けて発信した「長崎殉教アピール」なるものはありませんでした。

そして、この列福式においても、そのようなものは用意されてはいないようです。ただ、ミサの冒頭で「列福宣言」があるのみです。

しかし、27年前に故教皇によって蒔かれた種は、言われるような形で実っていくべきものであることは、言うまでもありません。

ご承知のように故教皇は、あの時の日本訪問を「平和巡礼」と位置づけました。そして、その一つのコースが被爆コースであったことは、皆理解していたと思います。そしてそれは、「広島平和アピール」という結実に至りました。

しかし、同じ平和巡礼のもう一つのコース、つまり「殉教コース」については、今に至るまで十分に消化されているとは言えないのではないでしょうか。その咀嚼のために、この27年間が必要だったとも言えるでしょう。

広島アピールの冒頭で故教皇は、こう訴えています。

「戦争は人間のしわざです。戦争は人間の生命の破壊です。戦争は死です。（中略）もはや切っても切れない〝対〟をなしている二つの町―日本の二つの町　広島と長崎は〈人間は信じられないほどの破壊ができる〉という事実の証しとして、存在する悲運を担った、世界に類のない町です」と。

長崎殉教アピールなるものも、これと〝対〟をなして、一人ひとりが結晶させていくべきものでしょう。

「殉教は神のしわざです。殉教は人間の生命の完成です。殉教は命です。もはや切っても切れない17の殉教地というつながりを持つ日本の教会は〈人間は信じられないほどの証しができる〉という事実の証人として存在する、幸運と喜び（マタイ5・12）を担った、世界に類のない教会です」と。

Q. 故教皇の宿題を果たすために、27年間にわたって、黙々と先導してくださった方々のことも、よく記憶しなければならないのではないでしょうか。

A. 第一面に記されているように、故教皇の訪日後、日本司教協議会は列福運動開始を決定し、キリシタン史の専門家を中心に、殉教者列福調査特別委員会を組織し、列福運動を開始しました。

その後この委員会は「列聖列福特別委員会」に名称変更されて、その所管事項は少し拡がることになります。

いずれにせよ27年間にわたって、この方々は、手製の鍬で固い土を根気よく掘り起すようにして、歴史の闇の中に、殉教者の姿を探し求めてこられました。

そのあまりにも地道な活動が、11月24日実りの時を迎えようとしているのです。

文化の違いという障壁もある中での、教皇庁列聖省との交渉や、三千ページにもおよぶと言われる資料の整理など、それは気の遠くなるような作業だったわけです。

あらためて、この方々の殉教的行為にも匹敵する活動に敬意と感謝をささげたいと思います。

新しい要理「共に歩む旅」(14)

第十二課「神の国」

［進行係］（参加者を歓迎して、十字架の印をしながら集いを始める）
「一人か二人の方が祈りで神さまをこの席に招いてくださいませんか。」

A．私たちの生活

［進行係］
「どなたか次の話を読んでください。」

「アフガニスタンは、あの9・11の米国中枢同時テロ以来、最悪の治安状態のようだ。カルザイ政権の支配地域はごく一部となり、反政府ゲリラが全土で活発化している中で、邦人拉致事件は起きた▲そしてあってはならない、起きてほしくない最悪の結果となってしまった。非政府組織（NGO）「ペシャワール会」の伊藤和也さん（31）が、遺体となって見つかった。▲現地の医療・民生支援活動を献身的に展開しているボランティアの一員が、犠牲になるとは。アフガン復興に夢を乗せ、農業技術の指導に身を投じていた。この冬で丸5年を迎えようとしていた。なんとも痛恨、やり切れない。▲日本政府が、米国の意向を背景に「自衛隊のアフガン派遣」を検討した時期があった。この時、ペシャワール会代表の中村哲医師は、身辺の危険を理由に、活動の一時停止について言及していた。「少なくともアフガン東部で親日感情をつないできた糸が切れる」（同会報紙）と懸念▲現地では、インド洋上の自衛隊給油活動はほとんど知られていないという。むしろ、日本は最大の民生支援国として歓迎されてきた。「私たちにとって大きな安全になっていたのは疑いない」と（長崎新聞2008・8・28）

「現地の人たちと一緒に成長していきたい」。「緑豊かな国に戻すことをお手伝いしたい」。「行ったとしても現地の厳しい環境に耐えられるか分かりません。しかし現地に行かなければ、何も始まらない」。

これが亡くなった伊藤和也さんのアフガン志望の動機だったという。

［進行係］（参加者たちに質問する）
①新聞が伝えるこのできごとについて、自由な意見を出し合ってみましょう。
②この若者のアフガン志望動機をどう思いますか。
③《自衛隊のアフガン派遣》に対する中村哲医師の文中のことばをどう思いますか。

B．神のことば

イエスは「神の国」を私たちに知らせてくださいます。神の国は本物の愛と平和が実現される場です。イエスさまは神の国がどのように実現されるかを、具体的に見せて下さいました。

［進行係］
「どなたかマタイ5・1―12（真実の幸福）を読んで下さいませんか。」

［進行係］
「ほかの方がもう一度読んでくださいませんか。」

［進行係］
①「今読んだ聖書の中で、心に響いた単語あるいは一節を選んで、大きな声で祈るように、3回読

んでくださいませんか」。
（同じ箇所を3回繰り返す間、他の人々は沈黙を守る。）
②「2分間沈黙し、神が私たちに話されることばに耳を傾けましょう。」
③自分が選んだ単語あるいは聖書の節がなぜ心に響いたかを互いに話し合ってみましょう。

イエスさまは、この地上に神の国を実現させるため、全生涯を捧げられました。そしてイエスさまは、私たちもまたその神の国の中で生きることを望まれました。

「だから、言っておく。自分の命のことで何を食べようか何を飲もうかと、また自分の体のことで何を着ようかと思い悩むな。命は食べ物よりも大切ではないか。空の鳥をよく見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父は鳥を養ってくださる。あなたがたは、鳥よりも価値あるものではないか。あなたがたの天の父は、これらのものがみなあなたがたに必要なことをご存じである。何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。」

（マタイ6・25―33）

参考聖書

＊マタイ　25・14―30
　タラントのたとえ
＊マルコ　4・26―29
　成長する種のたとえ
＊マルコ　4・30―32
　からし種のたとえ
＊ルカ　17・20―21
　神の国が来る

C．さらに一歩進んで旅をつづけよう

神の国はこの世の富・栄華より、まず神の正義と愛を実践する中に現われます。愛と正義が溢れる神の国を、この地上にうち立てるために、私たち各自に出来る事が何であるか探してみましょう。

［進行係］（参加者たちに質問をする）
①あなたが考えている真の幸福とは何か、紙に書き出してみましょう。その後、イエスさまが言われる真の幸福と比較してみましょう。
②平和のため働いている人や、正しい事をしていて迫害を受けている人たちを、周囲から探してみましょう。彼らのための仕事や、彼らと一緒に出来ることは、どんなことがあるでしょうか。

［進行係の心得］
「天国に行く」という信仰は、自分だけひとりでもという信仰体質を生み出すおそれがある。わたしたちは、いつも「み国が来ますように」と祈っている。このことへの気付きがこの課では迫られている。来ますようにと願うなら、まだ来ていないところ、イエス様の愛がおよんでいない場所が見えてきて、何とかせねばという気になるのが自然であろう。

［進行係］自由な祈りを捧げながら、集いを終わります。

「主よ」とまず呼び、そして自分の心を簡単に表現してみましょう。他の人たちは祈りが終わるとき「アーメン」と応えます。

・主よ！……アーメン
・イエスさま！……アーメン

［覚えましょう］

40．「神の国」とは何ですか。
＊神の愛が支配している状態または場所のことです。

41．イエスがくださった最も大事な掟はなんですか。
＊「神への愛」と「隣人愛」です。

42．なぜ十字架はキリスト教の象徴になっているのですか。
＊イエスが神への愛と人々への愛のために、十字架上で亡くなられたからです。

43．イエス・キリストを表わす象徴にはどんなものがありますか。
＊ギリシャ語の最初の字アルファ（α）と最後の字オメガ（Ω）で、この世の歴史の開始から終末までイエス・キリストが治められるということを意味します。

＊イエスが処刑された十字架上にはINRIという表札がついています。それはローマ総督ピラトが、イエスの十字架上に書いて付けた、罪状書きのラテン語略字で「ユダヤ人の王ナザレのイエス」(Iesus Nazarenus Rex Iudaeorum)を意味します。

「2000年の歴史における教会像の変遷と司祭の使命」(4)

森　一弘
（東京教区司教）

第38号　第3ステップの教会像
　　第4ステップの教会像
第39号　第5ステップの教会像
　　第6ステップの教会像
　　第7ステップの教会像
第40号　第7ステップの教会像（つづき）
第41号　第8ステップの教会像
3．むすび

てきます。

ルターは、当時のどうしようもない教皇や司教を仲介しなければ、人は神とキリストに結び付かないということはナンセンスであると言い、その構造を全部廃止しようとしたわけです。

教会分裂の究極のきっかけとなったのはサン・ピエトロ大聖堂改築です。

改築のためのお金を集めるために、世界各地に説教団が送られます。ドイツに送られた、お金集めのための説教団が、とんでもない説教をしてしまいます。

ある説教者はこう言ったというのです。目の前に献金箱をおいて、あの当時紙幣はなく硬貨しかなかったのですが、「銅貨を入れれば銅の音が、金貨だときれいな「キーン」という音がする。金貨の妙なる調が、地獄で苦しんでいる霊魂に届く。あなたが入れる金貨によって、地獄で苦しんでいる霊魂たちを救うことができる」と。

第5ステップの教会像

第5ステップの教会像は、第4ステップで見たようなピラミッド型の教会像に、崩れが見えはじめた段階のものです。プロテスタントが打ち出した教会像が関わってきます。具体的には、当時の聖職者たちの腐敗・堕落の批判となって、吹き出し

一つの小さな例ですが、ドイツの教会はつまづき、ローマに抗議したといわれます。

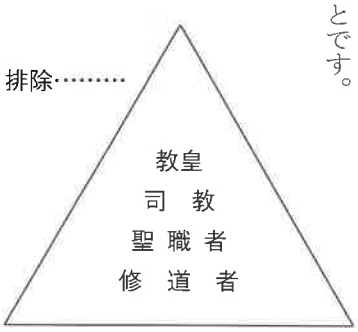
ルターも立ち上り、教会改革の有名な三原則を明らかにします。「信仰のみ、聖書のみ、恵みのみ」がプロテスタント運動の土台になります。

信仰のみというのは功徳の排除、人間の努力の排除。聖書のみというのは教義の廃止、努力すれば救われるということの廃止です。

その当時の教会の状態を考えると、これくらいのことを言わないと分からない、という状況だったと思います。こうしてプロテスタント教会からは聖職者が排除されます。

プロテスタントの、新しい流れの中の一つの特徴は、すべての信徒が祭司職を持つものとして理解されるようになったことです。

プロテスタントが失った大事なものもあります。その一つは、使徒継承の理念です。もう一つの問題点は、信仰は聖書のみ、ということからの結果として、個人主義におちいったことです。



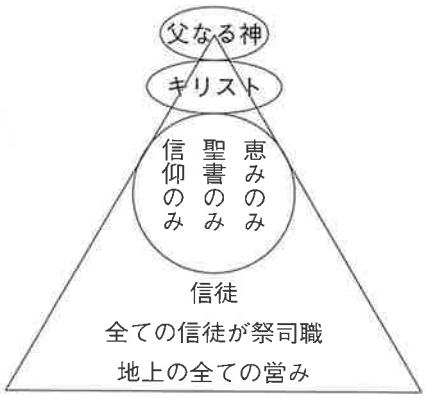
第6ステップの教会像

トリエント公会議によるカトリック教会改革によって現われ出た教会像です。神学校制度を確立し、聖職者の政治とのかかわり、俗世間との関わりを排除していくことにその特徴があります。

聖職者の役割は、秘跡と教義とをどう伝えるかということであり、きちんとした信仰・きちんとした生き方や、聖書というより掟に従うことが強調されます。

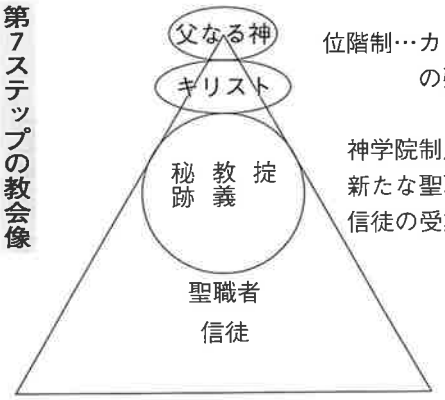
この秘跡・教義を中心とした教会像が、400年の間、第二バチカン公会議あたりまで大きく影響を与え続けることになります。聖職者中心主義が明確になります。こうして信徒が受動的な立場におかれるようになりました。

ここに現れたもうひとつの問題点は、聖書は独りでは読んではいけな



いという戒めです。その結果、聖書に関しては、カトリック教会はプロテスタント教会に対して、４００年遅れたとも言えるでしょう。聖書は神学のしもべになっており、完全に転倒していることがわかります。

この第６ステップの教会像というのは、かなりの浸透力を伴って、その後の教会のありように非常に大きな影響を与えてきました。



位階制…カトリックの正統性の強調

神学院制度の確立
新たな聖職者主義の流れ
信徒の受動性

第７ステップの教会像

第７ステップの教会像というのは、あまり言われていないことだと思うのですが、教会と社会が対立した点がその特徴です。

現代社会を作りあげているものは、自由、科学技術、それに資本主義という経済活動です。近代から現代の特徴は、この３つの柱を無視しては考えられません。

ところがこの３つが芽生えて、新しい社会が形づくられていったとき、教会はその意味を否定的にとらえたのです。

第二バチカン公会議までの教会は、現代社会と対決することになります。まず自由との対決です。自由平等を掲げたフランス革命が起こったとき、そのフランス革命は、ルイ王朝を破壊しただけでなく、ルイ王朝と結びついていたカトリック教会の破壊につながり、教会を否定することになってしまいました。

カトリック教会は、フランス革命の目標である自由に対して否定的になります。

アメリカの独立宣言に対しても同様です。アメリカ独立宣言の最初の項目にこういう表現があります。「われわれはわれわれが信じる神において、すべての人間は自由かつ平等であり、幸せになる権利を有していることを宣言する」と。

この独立宣言に言われている「われわれが信じる神」という表現には、実はカトリック教会を排除する意図が含まれていたのです。

プロテスタントの教会が、主流となって独立宣言がつくられておりました。その当時のバチカン側から見ると、アメリカニズムは、反カトリシズムとして映っていたわけです。そしてローマへの従順こそ、救いへの最高の道である、というスローガンを掲げたわけです。

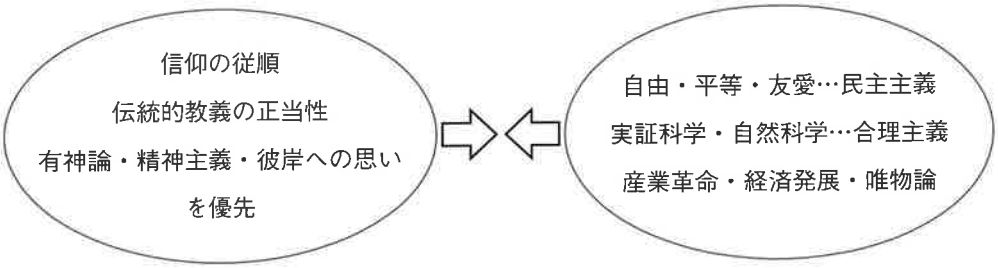
もう一つは、自然科学です。ガリレオなんかの問題が起こります。教会は、合理主義、実証主義の芽生えにより、天地創造についての教えとか、マリア様の処女懐胎、聖変化、三位一体などは合理的に説明できないという挑戦を受けることになります。

伝統的な教義を守るために、カトリック教会は合理主義・実証主義を弾圧することになります。

また、産業革命による新しい資本主義が芽生え、そこに出現した労働者たちの問題を、教会はなかなか理解できませんでした。その問題を、単に霊的な問題として解決しようとしました。「貧しい者は幸いである」と。

労働者たちの救いとして共産主義が誕生してきます。マルクスなんかは、宗教は貧しい者のアヘンである、と決めつけます。

これらと対決しながら、教会は自分を守ろうとします。勢いを増してヨーロッパ全体に拡がる新しい問題に、それぞれの地域の司教たちは、もう自力では対処できなくなってしまいます。世界各地の司教たちや信者たちの間に、バチカンを中心にすえて、こういう問題と対決しようとする新しい気運が生まれ、教皇を中心とした中央集権体制が強固になっていきます。



教会と社会の遊離、信仰と生活の遊離

大司教談話室 ④

私にとって〝信者でない人〟とは誰？

Q. わたしたちは、これまで長い間、教会に属さない人々を救われない人たちと見なしてきたと思います。カトリック信者にとって〝信者でない人〟とはどんな人たちでしょうか？

A. 旧約の民は、自分たちに属さない人々を「無割礼の汚れた者」（イザヤ52・1）と見なし軽べつしていました。それは、「神に選ばれた民」という恵みを自分たちだけのものと理解していたためでした。

しかし、神はアブラハムに「地上の氏族はすべてあなたによって祝福に入る。」（創世記12・3）と約束し、はじめから彼とその子孫を通して新しい人類をつくることを計画しておられたのです。すでに紀元前8世紀に、預言者イザヤは、全人類が一つになる時が来ると預言しています。「終わりの日に…国々はこぞって大河のようにそこ（エルサレム）に向う。」（イザヤ2・2）エジプト、アッシリア、イスラエルが、つまり、多神教の国々、絶えず敵対していた国々が、共に唯一の神を礼拝する時が来る（19・16―25）。

その「時」は、主イエスによってもたらされました。イエスは、御父の計画に従って、まずイスラエルの民の心を刷新しようとされました。（エレミヤ31・33―34、マタイ10・6、15・24参照）。しかし彼らは受け入れませんでした（ヨハネ1・11、ルカ13・34―35、使徒言行録13・26―27、46）。一方、イエスは、〝異邦人〟も救いへ招かれていると教え始められます。ご自分につまずいたナザレの人々に対して、かつてシドン地方のやもめが預言者エリヤの言葉に素直に従い（列王記上17・8―16）、シリアの司令官ナアマンが預言者エリシヤの言葉を信じて救いの恵みを受けたこと（列王記下5・1―19）を思い起こさせました（ルカ4・25―27）。

そしてローマ人の百人隊長やカナンの女性の信仰に感嘆し、彼らの願いをかなえ（ルカ7・1―10、マタイ15・21―28）、ユダヤ人から異邦人同様に軽べつされていたサマリア人の心をご覧になりました（ルカ17・11―19、10・25―37参照）。

神は、「異邦人に信仰の門を開いてくださった」（使徒言行録14・27）し、「人を分け隔てなさいません。どんな国の人でも、神を畏れて正しいことを行う人は、神に受け入れられるのです。」（10・34―35）。実際、「聖霊の賜物が異邦人の上にも注がれ」（10・45）ました（15・7―11参照）。結局、キリストのおかげで、イスラエルの民だけでなく異邦人も神の無償の救いの恵みを受けることができるのです（ローマ9・22―24）。もはやからだの割礼は問題ではなく、「キリストの割礼」すなわちキリストの死と復活にあずかる洗礼と生き方こそ重大なのです（エフエソ2・11―13、4・17―5・5、コロサイ2・11―14、3・1―17）。

従って、〝信者でない人〟とまずは同じ人間としてかかわるべきです。**「神の姿に似せて造られた人間の中の一部の人々に対して、われわれが兄弟として振る舞うことを拒否するならば、われわれはすべての人の父である神に呼びかけることはできない。父なる神に対する人間の態度と、兄弟である人に対する人間の態度は、聖書の中に『愛さない者は神を知らない』（一ヨハ4・8）と言われるほど密接に結ばれているのである。**それゆえ、人と人の間、民族と民族の間に、人間の尊厳とそれに基づく諸権利に関して差別を導入するすべての理論や実践は、根拠のないものである。したがって教会は、民族や人種、身分や宗教の違いのために行われるすべての差別や圧迫を、キリストの精神に反するものとして退ける。」（『キリスト教以外の諸宗教に対する教会の態度についての宣言』5番）

もちろん、わたしたちはキリストを告げているし、また絶えず告げなければなりません（同2番）。それは、例外なくすべての人がキリストの救いの恵みに浴することができるという真理を受け入れると同時に、信者として福音にふさわしい考え方や生き方をし、キリストの愛を証しするよう努力することをも意味しています（一コリント9・23、27、フィリピ3・10―11参照）。そうでなければ、聖書の中のユダヤ人たちの轍を踏むことになります。

（髙見三明）

突然の訪問 温かい招待

去る８月31日は島本大司教様の７回忌でした。関わりのあったグループや共同体では追悼ミサが計画されて、郷土の仲知では、出身司祭や修道者が集まって追悼のミサを行ないました。2002年に大司教様を団長として行なわれた　大聖年、青年聖地巡礼団参加者による追悼ミサも行なわれたようです。

司教様と初めて出会った時のことを思い出します。司教様はある日、バチカン関係の奨学金を受けて、勉強している修道女の国際寮に突然来られました。受付から「日本人の司教様が来ていらっしゃるよ。早く」と呼ばれ、驚いて４階から降りて行きました。

司教様は、「ウルバノ大学内の国際寮に日本人のシスターが一人いる。しかも長崎出身者だ。」と、どなたかに聞いて、わざわざ訪ねてくださったのです。

「私は、五島の仲知出身で浦和の司教」と気さくに自己紹介をなさり、優しい笑顔で夕食に誘ってくださいました。こうして断わる間もなく出かけました。開店には早い時間でしたが「散歩でもしましょう。」と言われました。初対面の人を緊張させない素朴で穏やかな誘いと恵比寿顔が醸す温かさは人間性の表れでした。

バチカンの聖ペトロ広場に繋がる、コンチリアチオーネ通りを散歩する間、ご自分のローマ滞在中のことも話してくださいました。長い通りを何度か行ったり来たりしましたが、司教様は終始笑顔で後ろ手を組み、楽しく話してくださいました。

20年前のことですが大変懐かしく、あのトラットリアはまだ残っているのだろうかと思う時があります。チャンスがあればあの店に行って、突然寮に現れて見知らぬ私を夕食に招待してくださった司教様の懐の大きさを偲びたいと思います。

小さい頃から苦労人だった司教様ならではの温かさは、顔にも振る舞いにも滲み出ていました。赤城の墓地で墓碑銘を見るたび、隣の司教様方に比べて早逝だったなと思います。

巡礼の団長としての任務を終え、安堵して天国に旅立ったと思いますが、最後の日々は高熱と息苦しさで本当に辛かったと思います。後日、もともと空調に弱かったと聞きました。

自分も乗り物内の空調に弱いので、この話を聞いただけで辛さが分かりました。最後の犠牲を青年達とともに献げた司教様のことと、世界の青年達にメッセージを残しながら逝った教皇ヨハネ・パウロ二世の姿が重なります。

「大司教様、あの日の夕食、ありがとうございました。墓参りするとき、たびたび思い出しています。

食事中に、大司教様が提供してくださったことで、実現できなかった大変残念なことがあります。

夏の休暇中、寮が閉館した時住む所を探せなかったら、いつでも言いなさい。 オーストリアの友人に頼めば、喜んで無料で受入れてくれる修道院があるからと言ってくださったのに、チャンスをつくれなかったことです。

オーストリアは北イタリアの国境を越えれば隣だったのに。音楽の街、ザルツブルグへの思い。中世の美を残す美しい街並み。司教様の親切な提案は、ちょっといい話ではなく大変いい話だったのに！

大司教様、これからもご招待よろしく。次は天の大宴会でしょうか。そこに辿り着けるように、くれぐれもよろしくお願いします。最終目的地ですから」

Sr. 木口直恵

長崎南地区列福式特別企画に向けて

教会巡礼散歩「まるちれすの道行き」

～巡り合い、学び合い、祈り合い～

列福式に向けて、気運の高揚が話題となるなか、長崎南地区の司祭月例会議では、地区独特の列福式ステップ行事につき審議が行われた。その結果、教会巡礼散歩「まるちれすの道行き」～巡り合い、学び合い、祈り合い～の実施が決定された。

この行事の意図するところは、福者一八八人全員についての十分な認識を持つことは困難としても、一人でも多くの信者が、ある程度顕著な方々についてだけでも知っていただくための機会を提供することにある。それにより、他の福者たちにも思いがおよび、賛美と取り次ぎを願う祈りに熱意がこもり、列福式へ一層有意義に参加して頂こうというものである。

この企画はまず、一八八人の福者を個人またはグループで十五組にわけ、長崎南地区の十三小教区と青年部とコレジオを含む十五の共同体がそれぞれ一つずつを研究テーマとして選び、まず研究チームを設置し、テーマとして引き受けた福者につき資料の収集や調査研究を行なう。つぎに、その結果浮かび上がった殉教者の生涯と信仰、受難と殉教などにつき発表のためのシナリオや資料映像の制作がなされ、出演者や朗読者、解説者などのキャスティングを行なって発表の準備を整える。子供たちによる作文や絵画の発表、聖歌隊や器楽の演奏などが発表会に豊かさを増すことはいうまでもない。発表の方法や資料の量に関しては、それぞれの共同体の特徴をフルに生かすことが出来る。大切なのは、発表を含むこれらの過程が、よくありがちな役員やごく限られた、いつもの顔ぶれだけで進められるので無く、共同体の出来るだけ多くのメンバーの参画によってなされることである。また、この意図に沿うため、補助的利用を除いて、既刊図書の単純朗読、既製の市販映像（ビデオ、ＤＶＤなど）の再生や、一人講演を主とした発表は避けることが望ましい。

この企画「まるちれすの道」には～巡り合い、学び合い、祈り合い～のキャッチフレーズがある。これには、この企画が含むいまひとつの意図がある。またの名を「教会巡礼散歩」と名付けたこの行事は、あるどこかの劇団が同じ芸題を携え、同じ役者を引き連れて各所を巡回公演するのとは違って、地区のそれぞれの教会を会場として、いずれも違ったテーマ（殉教者）を題材として行なう発表会である。そしてこの発表はじぶんの共同体のためにだけ行なうのではなく、他の教会の兄弟たちにも来て観賞してもらい、他の共同体の発表会にも出来るだけ参加し合うことにより、一層みのり豊かなものにすることを願っている。

この行事をとおして同じ地区内でもなかなか訪ねることのない教会や兄弟たちと出会うことが出来る。それにも増して、巡礼の都度、それぞれの共同体が精いっぱい準備した発表会に参加することで、毎回ちがった福者との、新たな出会いに恵まれることである。

毎日曜日、午後の巡礼散歩で訪れた共同体で、その兄弟たちが、研究テーマとして親しんだ福者たちについて、共に学び、共にたたえ、その取り次ぎを共に祈り合える喜びを体験したい。

地区外からの来場大歓迎である。

長崎南地区地区長　野下千年

［付加－１］これまでの実施概要

去る七月二十日、馬込教会がこの企画のスタートを切ってくれた。子供たちの熱意のこもった作文発表。第二回は香焼教会。京都河原の五十二人の大殉教。幼児から老人まで総勢二十七人の出演は圧巻。第三回は八幡町教会。天国から呼び返された福者二人、ＴＶアナウンサーと対談。第四回木鉢教会。子供たちのジャンボ紙芝居と少年歌隊、聖体賛美式。第五回、大浦教会。アダム荒川の殉教を映像とキャスティング朗読で。中高生十一人が出演、若者がいる教会の証しも演じてくれた。第六回、愛宕教会。薩摩の殉教者税所七右衛門の殉教を放送劇風に。第七回、中町教会。少年使節中浦ジュリアンを大型スクリーン映像（一部出演）と。ナレーションで。

以後八回続行、十一月二日終了。

「ペトロ岐部と187殉教者」列福式前夜祭について

列福式前日、11月23日（日）に長崎市内のいくつかの教会で前夜祭として「祈りの集い」が行われます。

列福式を迎えるこころをよく準備するために、列聖列福特別委員会は10月５日から「列福をひかえ、ともに祈る７週間」の小冊子を準備し、殉教者のメッセージを黙想するようにわたしたちに呼びかけています。前夜祭はその集大成の祈りにもなります。

この日、①日本の教会に新しく188人の福者を頂く恵みに感謝し、②福者との交わりの中で日本の教会のために祈り、③各々自分の信仰を希望のうちに生きるための決意を新たにするために、多くの信者たちが（個人的に・家族で・団体で）指定された教会を巡礼してくださるように願います。皆さんの事情によって、たとえ指定教会をすべて巡礼できなくても、たとえば最寄の巡礼指定教会でゆっくりと時間の許す限り祈ることもできます。

巡礼指定教会として、浦上教会・城山教会・大浦教会・26聖人記念聖堂の４つの教会を選びました。26聖人記念聖堂（西坂）は福者の殉教地であり、城山教会はアウグスチノ会が司牧する教会で、金鍔次兵衛神父の修道会です。大浦教会と浦上教会は長崎の信仰の歴史的遺産を継承する教会です。

「祈りの集い」は午後４時から午後９時まで各巡礼指定教会で行われますが、浦上教会では午後５時～午後５時45分まで列聖列福特別委員会委員長溝部司教様（高松教区）の司式で「前夜の祈り」が行われます。また、城山教会ではアウグスチノ会の関係者によって「列福に対する感謝のミサ」が行われます。

尚、指定教会では常時ゆるしの秘跡を受けることができるように司祭団の協力を要請しています。また、前夜祭中は巡礼指定教会ではミサの希望を受け付けていません。ミサを希望する巡礼団のためには、中町教会に協力を依頼しています。以下のスケジュールでミサの希望を受け付けていますので、中町教会（095－823－2484）に事前にご連絡ください。

ミサを希望する巡礼団や信徒のため				
16：00	17：00	18：00	19：00	20：00
～	～	～	～	～
16：50	17：50	18：50	19：50	21：00

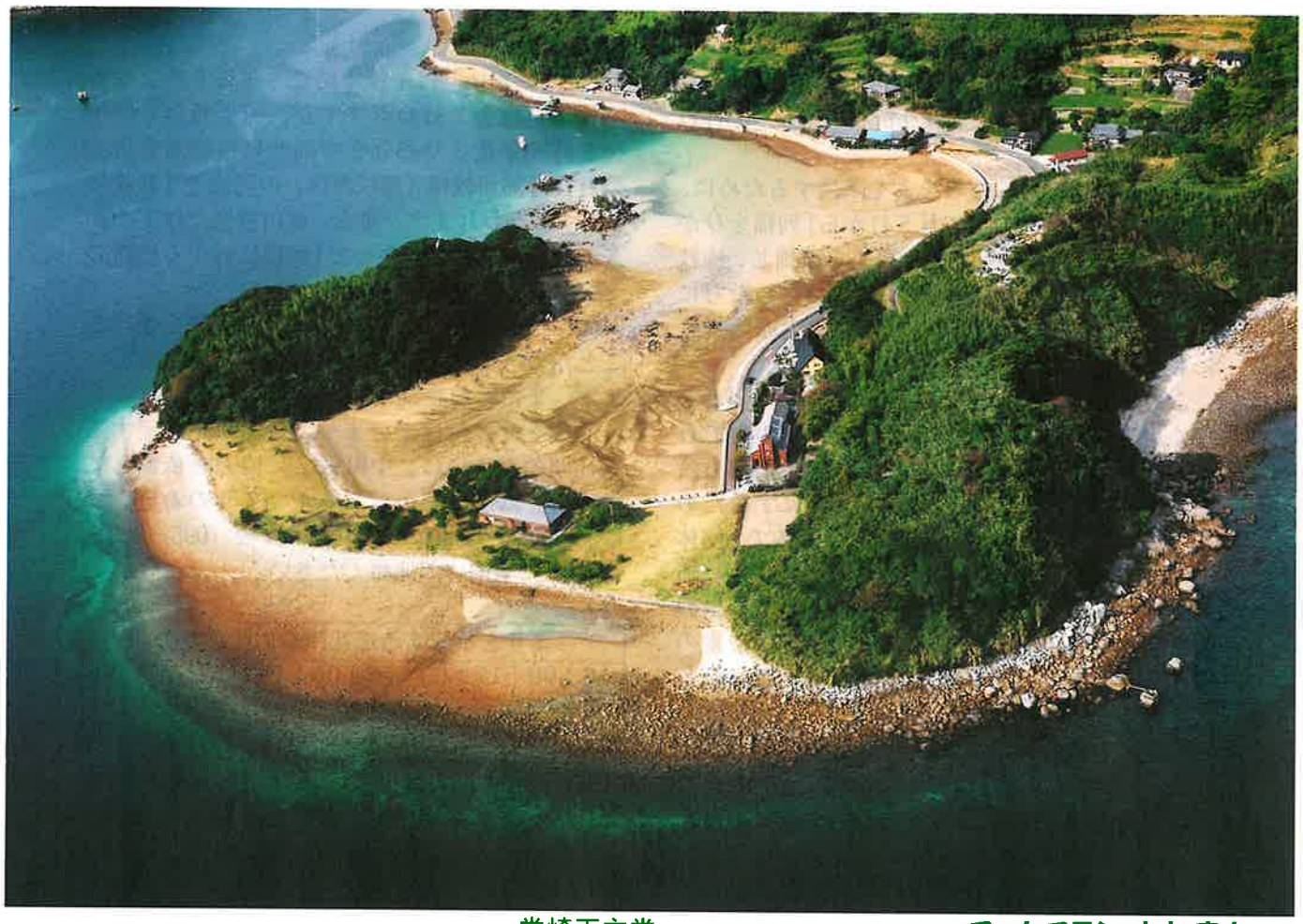
前夜祭のためには多くの司祭、修道者、信徒の皆様の協力が必要です。特に長崎地区の司祭団や小教区のご協力をよろしくお願いいたします。

以下各四ヶ所における集いの詳細をお知らせします。

①浦　上　教　会		②城　山　教　会		③大　浦　教　会	
テーマ：「命をかけて『いのち』を生きる」		テーマ：「ときを超え今ひびく福者の祈り」		テーマ：「証－一八八－」	
聖体礼拝		みことばによる黙想		ロザリオ	
16:00-16:45	祈りの集い	16:00-16:40	祈りの集い	16:00-16:45	祈りの集い
17:00-17:45	**前夜の祈り**	16:55-17:35	祈りの集い	17:00-17:45	祈りの集い
18:00-18:45	祈りの集い	**18:00-19:30**	**感謝のミサ**	18:00-18:45	祈りの集い
19:00-19:45	祈りの集い	19:30-20:10	祈りの集い	19:00-19:45	祈りの集い
20:00-21:00	祈りの集い	20:20-21:00	祈りの集い	20:00-21:00	祈りの集い

④**「26聖人記念聖堂」**では青少年委員会の協力の下、青年たちの意向を考慮しながら集いが行われます。（殉教者の理解を深めるため、青年たちによる「恵みの風に帆をはって」の朗読を中心とした祈りの集い、また 17：00~17：20 教皇代理と共に祈る集いを計画中）。

生活の中の教会



堂崎天主堂　　フォトプラン 山本 富夫

堂崎百周年

田ノ浦瀬戸に臨む奥浦湾の入口に建つ教会堂。水面に映る麗姿は清く透き通っている。

信仰の始まりは、一五六六年、来島したアルメイダとロレンソによる。領主の庇護を受け、往時には信徒二千人程がいたという。しかしその後、時は動き迫害の時代へ。

一七九七年、藩は開墾のため大村藩に農民の移住を願う。これを機に「外海」から多くの信徒たちが周辺の地に移り住んだ。

教会堂は今、献堂百周年を迎え、新たに歩みだすかのように海の青に映えている。